

中国史いろいろ 知っているようで知らない『西遊記』一行

戸田奈緒子

演劇やテレビドラマ、漫画、映画等の題材として、あるいは人物名等のモチーフとして、我々にも馴染み深い『西遊記』。明代に成立した荒唐無稽な白話小説で、作者は長春真人こと丘処機、あるいは呉承恩などと言われますが、四大奇書と並び称される『三国志演義』『水滸伝』『金瓶梅』同様、はっきりとは分かっていません。

物語は、唐の貞観年間に、仏教発祥の地である天竺（インド）へ巡礼と経文原典を求める旅に出て帰国した後、法相宗の開祖となった玄奘三蔵が著した『大唐西域記』を下敷きに、幾つもの三蔵伝説を取り入れ南宋末頃に成立した『大唐三蔵取経詩話』が原型になっていますが、ほぼ史実とは関係ありません。作中の三蔵法師は、生立ちすら史実の玄奘と違う上に、神通力を持たない普通の人間のため、困難に遭遇しては四苦八苦し、従者らに助けを求める情けない役回りにされています。しかし、実際には、建国されたばかりで政情が不安定だったために、出国許可が得られなかった唐から国禁を犯して密出国した後、高昌国（新疆ウイグル自治区トルファン市にあったオアシス国家）の王である麴文泰の歓待を受け、国師となって留まって欲しいとの要請も断り、様々な支援を受けつつ中央アジアを経てインドへの旅を続けたという信念の人でした。『三国志演義』の劉備しかり、『水滸伝』の宋江しかり、こういった通俗小説では、魅力的な味方の活躍を引き立たせるために中心に置かれる人物は無能にされがちです。

事実上の主人公として大活躍を見せるのは、言うまでもなく花果山の石から生まれたサルの子孫悟空です。齊天大聖という道教の神であり、作中では諱を避けて孫行者と称されます。冒頭では美猴王（猴＝サル）を名乗り、「大鬧天宮」つまり天界の神々を相手に大暴れした結果、玉帝の外甥である鎮元聖二郎真君に敗れ、彼の連れてくる神犬に噛みつかれて捕らえられます。いわゆる犬猿の仲、です。処刑される所でしたが、無敵の体のためにどんな武器であっても傷がつかず、太上老君の八卦炉でも燻されただけ、仕方なく釈迦如来によって

五行山の岩の隙間に閉じ込められます。500年後に、三蔵法師によって救い出されて弟子入りし、罪を償うべく西天取経の旅に同行することになるのはよく知られている通りです。

第二の弟子である猪八戒は、名前の通りブタ（イノシシは野猪）の妖怪ですが、本来は天蓬元帥という歴とした天界の役人でした。女癖の悪さで地上に流された際、誤って雌豚の胎内に入ってしまったためにブタの姿になったのです。好色、怠惰、大食、と絵に描いたような道化役のトラブルメーカーではあるものの、どこか憎めないところがあります。台湾等では猪哥神として信仰されています。ちなみに八戒、とは三蔵法師に与えられた通称で、観音菩薩が付けた本名は猪悟能といえます。もっとも、この名は悟空、悟浄と並べるための後付けのようです。

そして、孫悟空と猪八戒の仲立ち役のような沙悟浄。よく河童とされる沙悟浄ですが、河童は日本独自の妖怪です。元は青とも黒ともつかぬ顔色で、赤い髪を振り乱し、裂けた口元には剣のような歯が並ぶ、と恐ろしげながら想像し辛い容貌である上に、いた場所の名が流沙河ということもあり、日本人に分かりやすく河童にされました。しかし、実は本来の流沙河は水辺ではなく、河のように砂が流れる危険な砂漠です。史実の玄奘も遭難しかかった地で、その際に夢に現れた、毘沙門天の化身である深沙神が沙悟浄の前身といわれます。外見は、ワニがモデルという説もあります。猪八戒と同じく天界の役人の捲簾大将だったのが罪を得て追われ、三蔵法師に出会って弟子入りし出家したため、作中呼称は沙和尚です。

ドラマ等では、エピソードが改変されていることもよくあるため、意外と知らないことも多いかもしれない『西遊記』の三蔵法師一行。折しも、コロナ禍で妖怪アマビエが発掘されたように、改めて彼らと西へと旅してみるのも面白いでしょう。

■参考文献

中野美代子著『西遊記の秘密：タオと煉丹術のシンボリズム』（福武書店（ベネッセ））

とだ なおこ（司書・管理運営課）